

まえがき この議論の前提としての定説への疑惑

1. 疑惑の対象

- ・孝徳紀大化三年647年の淳足柵(新潟市か)設置、同四年648年磐船柵④(村上市か)設置も不可能。
- ・斉明天皇の時代四年の安倍比羅夫の遠征記事で秋田・能代・津軽まで支配することは不可能。

拙稿:「斉明紀から見える『日本書紀』の虚偽 蝦夷征討記事について」東京古田会ニュース No.214

- ・『書紀』の外交史は疑う。蝦夷は『唐会要』『冊布元龜』では蝦夷国として倭国と共に一つの独立国であった。ヤマト王権にとって蝦夷国は外国であり、両国の関係は外交史としてとらえられる。
- 孝徳紀・斉明紀などにおける蝦夷征討関連記事には疑いの目を向ける。

2. 上記、疑惑の根拠

- ・文武二年698年十二月二十一日の石船柵(以下、磐船柵)修繕、同四年700年二月十九日に磐船柵造営記事。
⇒重出か? 否。大化三年の岩船柵設置についての仮説:「大化の磐船柵は蝦夷によるもの。孝徳側がその柵を発見した。」
- ・元明和銅二年709年に征越後蝦夷将軍に佐伯宿祢石湯が任命されている。越後の蝦夷が征討されていない。
- ・『旧・新唐書』日本国伝咸亨元年670年の「山外は毛人」記事。毛人=蝦夷と考える。関東以東や越後は山外。

はじめに

1. 柵と城は違うのではないか、また城柵とも違うのではないか

『続日本紀』では柵と城が記述される時代が異なる点から考察が始まる。…後に第1節で史資料を見ながら通説がよく使う「城柵」という用語は柵と城との区別を曖昧にする用語ではないか。「柵=城=城柵」になっている。

2. 多賀城碑が偽作でなければ真実が記されていると言えるのか …多賀城碑碑文を見ながら

多賀城碑偽作説の立場はとらないが、『続日本紀』の記述内容から、その碑文が正確ではない可能性を探る。

一般的には、「多賀城碑が偽作ではない」⇒「真実が書かれている」⇒「大野朝臣東人(おおのあそんあずまびと:以下、東人)が聖武神龜元年724年に設置」という結論が導かれ、それを前提にした議論が行われている。

はたして東人は724年に多賀城造設に関与したのか。この点を考察していく。

第1節 時代区分 以下の1. 2. 3. は史資料を見ながら

1. 「柵の時代」

『続日本紀』では文武二年698年 石船柵(以下、磐船柵)に始まり、元明和銅二年709年 出羽柵、聖武天平九年737年までに玉造柵、新田柵、牡鹿柵④。そして同じ737年二月十九日に多賀柵として多賀の名が初登場。737年に柵が続々と登場。「柵」のみ登場。「城」はない時代。…737年に複数の柵

孝謙天平宝字元年 757年 4. 04 陸奥の桃生柵、出羽国の小(雄)勝柵…柵が久々の登場。

2. 「城の時代」

聖武天平九年737年多賀柵が初登場した同年四月四日に「城柵」を築いて人民を住まわせる、さらに「城郭」など「城」の語が登場。…文章化した時点で見落としがあり、追加し訂正。これについては第三節で触れる。

これが「城の時代」の始まりか。ただし「城」の名前は特定されておらず、どこのどんな城かは不明。

しかも、東人が「陸奥国から出羽柵まで直通路を設置する」ために、多賀柵を進発する記事の中でのもの。多賀は柵であることは確認しておきたい。多賀以外に設置された城なのか。…この時点は、多賀は「柵の時代」におさまる。

・名前の分かる城が『続日本紀』に登場するのは遅い。…本格的な「城の時代」

その最初は淳仁天平宝字二年758年に桃生城(ものおじょう)。同六年762年に雄勝城◎(共に柵から城へ昇格)。

称徳神護景雲元年767年に伊治城、光仁宝亀十一年780年に覚鯨城◎(かくべつじょう)、

同年780年、三月二十二日、伊治公皆麻呂の乱で多賀城が初登場。「柵から城への昇格」。

多賀城は乱の中で焼失。この城を「焼失多賀城」と名付ける。

桓武延暦七年788年三月二日 兵糧三万五千石を陸奥国に命じて多賀城に運び修めさせた。

この多賀城を「再建多賀城」と呼ぶ。

・この時代以降、柵は「ほぼ」登場しないと言えるが、この点は後の4で触れる。

なお、738年から756年の間(聖武天平の時代)には柵も城も記されていない。…「懐柔・帰順」が進んだ時代かこの期間、柵は存在しているだろう。書かれていないが、城も「築造されていない」とは言えない。

『続日本紀』では「柵も城もその記述が空白の時代」。…記録するに値する戦闘がなかった時代とも言えるだろう。

3. 「城砦・城塞の時代」 …この項は、この梗概で追加された。…「城の時代」の一種ともいえる。

光仁宝亀十一年780年三月二十二日 皆麻呂の乱 多賀城が襲われ、焼失。

同年、十二月十日以降に『続日本紀』に砦、塞、城塞が初登場し、その後頻出。

…皆麻呂の乱が契機となったのであろう。砦・塞によって城をさらに強化したものであろう。

桓武天応元年781年 「奪われた諸々の城塞を回復した」とも記されている。

蝦夷に襲撃され、ときに敗北していたことを表明。

補足：蝦夷側の反抗が頻発する時代。なぜか？ ヤマト朝廷の東北への侵攻意志は、①「広くて豊穡な大地の陸奥」の他に、②聖武天平勝宝元年 749陸奥から初の黄金9百両 13.5kg、称徳天平神護2年 766にも。

⇒発掘された黄金によってさらに侵攻が強まり、より北上。これらが蝦夷側の反抗心を煽ったと思われる。

4. 城の時代の柵

「ほぼ」登場しなくなった柵について

(1)柵戸、城柵という語として柵は現れている。…これは「城の時代」の城との関係での表現ではないか。

城ができ、柵戸(帰順した蝦夷と他国から移住した良民ら)を住まわせるための柵を城内に造る時代。『続日本紀』の城柵とはそのような柵を備えた城のことではないか。

(2)「敵の急所」に楔を打ち込むための柵。

淳仁天平宝字四年(760年)正月四日条で藤原朝猟らが雄勝城を完成させた。その後、朝猟は次の様に天皇に称えられる。「高く険しい峰を越えて桃生柵をつくり、敵の急所である地点を奪った」と。しかし、この時点ではすでに桃生城がその二年前の淳仁天平宝字二年(758年)十月二十五日条時点で存在していたのである。柵と城が同一のものとする研究者にとっては重出と理解されるかもしれない。だがこれは重出ではないだろう。場所の描写も含めて桃生柵と桃生城とは別物であっただろう。場所だけでなく、役割も材質も全く異なっていたに違いない。城とは別に蝦夷対策のために緊急に造成された桃生の地に新たに造られた柵の可能性が大きい。両者を同一視することはできないだろう。

・もう一つ別の柵がその後の時代にもある。光仁宝亀十一年(780年)八月二十三日条には由理柵という名が登場する。「秋田城に通じる由理柵は賊の要害の地に位置している」とある。

これらは「柵の時代」の柵とは別の、そしてまた柵戸を住まわせる城内の柵や政庁施設などを内部に備えた城とは別の役割を果たしていた様子が見えてくる。これも蝦夷との最前線の地に楔(くさび)を打ち込むために緊急に作った施設と

ということではないか。桃生柵、由里柵はともに、緊急時に仮設的に造られた可能性のある柵。その独自の役割を果たすものが必要であったのであろう。

3. 第1節 まとめ 以上、『続日本紀』に基づく、「柵の時代」と「城の時代」とでは明白に異なっている。

第2節 柵と城の違い

1. 建築素材

- ・九州などの大野城、基肄城(きいじょう)など朝鮮式山城は「城」、土偏。柵の用語は記されていない。
- 柵は木偏、強さの違いがある。柵の遺存の条件は井戸、川辺などの水場。木簡などの遺存の条件も同様。木簡は井戸に廃棄されたものが大多数。土中では分解され、消失する。
- ・淳足柵(ぬたりさく)、磐船柵、出羽柵など柵の痕跡は発見されていない。おそらく柵は防衛上の必要から低地(川や池のそば)には設置されることはないだろう。柵が遺存しない原因もここにあるのだろう。
- ・反対に、土を固めた築地塀、石などは水が無くとも遺存する。城、城塞などは遺存する。
- …多賀城跡の発掘調査は「焼失多賀城」、「再建多賀城」のもので、柵のものではないと思われる。
- …各地の発掘調査も柵の発掘は行われず、城の発掘になっている。「最初期から築地塀に囲まれた政庁があった」という帰結が導かれているのではないか。

2. 強度、規模、機能

- ・一般に、柵では蝦夷の攻撃に耐えがたい。築地塀で守りを固めるようになる。城塞も必要になる。(それでも破られる。)
- ・「柵戸」を住ませるための柵を城内に造る。武力で威嚇するだけでなく懐柔し、帰順させるための施設、良民と同化させる。「蝦夷を教え諭す場」でもある。天皇の慈愛、また農耕の方法など
- …『続日本紀』の「城柵(柵を備えた城)」という語もここに由来するのでは。
- ・政庁、官衙(かんが)の設置により住民の管理、戸籍づくり、徴税台帳の管理、物品の移送の管理などを行う。くり返しになるが、通説的には、「多賀城はその最初期(724年)から広大な敷地の中に築地塀、官衙があった」などとされている。例えば、『大宰府と多賀城』石松好雄・桑原茂郎 岩波書店 1985年 第二刷 92頁。

3. 第2節 まとめ

以上、『続日本紀』は柵・城・城柵の語を区別し、それらの時代区分も意識していたのではないだろうか。

第3節 大野東人と多賀の関係、そして朝獺 以下の1. 2. は史資料を見ながら

1. 東人の経歴 またその時代と役割 …石碑に名を残した東人。それにふさわしい活躍があったはずだという視点で
 - ・東人は元明和銅七年714年 新羅の使者の入京を出迎える。…東人の初出
 - 【・聖武神龜元年724年 東人従四位上 多賀城碑によると「この年に東人が多賀城を設置」】…実際には従五位上・同二年725年 位階三階進級で正四位下に(従五位上→正五位下→正五位上→従四位下)
- Wikipedia などでの評価 「東人は副将軍の立場であった」ので評価されたのではないかと推測されている。
- しかし、724年四月七日時点では、陸奥に藤原朝臣宇合が持節将軍、高橋朝臣安麻呂が副将軍として存在していた。また、『続日本紀』には東人の武勇伝は何も記されていない。何らかの活躍があったと仮定しても、宇合、安麻呂らを差し置いて多賀城碑に名を残す可能性は小さい。しかも、この時代は「柵の時代」であって「城の時代」ではない。
- ただし、東人の東北赴任が暗示はされているので判断が難しい。宇合・東人・安麻呂の順に昇進記事が書かれている。

2. 活躍が際立つ東人…東人の多賀での活躍

(1) 聖武天平元年729年九月十四日 陸奥鎮守将軍となる…東人が東北に赴任したことが明示され、活躍する段階このときの東人の言上。「鎮守府の兵士と人民らのうち、勤務振りや軍功を記録してもよい者には官位を授けて後輩たちの励みとさせたい。」そして、これが朝廷から承認される。

(2) 同九年737年正月二十三日 東人の言上「陸奥国より出羽柵に至るのに雄勝を経由しない直通路を完成させたい。」これが承認されて、持節大使従三位藤原朝臣麻呂、副使佐伯宿祢豊人らが多賀柵へ。

・同四月十四日、藤原麻呂が戦況を報告し、東人を絶賛する。「臣下の麻呂は愚かで事情に明るくないが、東人は久しく(729～737年までのことだろう)将軍として辺要の地にあり、作戦が適中しなかったことは殆どない。」

・同十一年739年 参議に。・同十二年740年 藤原広嗣の乱平定のため九州へ。…東人は東北から離れる

・同十三年に三位に ・同十四年742年 死去

以上、729年から740年までならば東人は多賀に関与できた。しかし、737年までは「城の時代」になっていない。東人が多賀「城」に関われるのは、わずかに738年から740年の間に限定される。

3. 東人と多賀城の関わり。幾つかの可能性

(1) 東人が将軍格として多賀に関わったのは729年から。しかしこの時期は「柵の時代」だ。(当然、724年も「柵の時代」)。よって、多賀柵の設置者として名を残すことは可能。しかし、【多賀城碑が設置されたのは762年】という「城の時代」なので、東人が関わったのは多賀柵であったにもかかわらず、多賀「城」の建造者とされた。

…「後代の知見が前代に混入する」という問題。第四節のテーマ

(2) 737年に「城の時代」に入る。『続日本紀』に記されていないにもかかわらず、「多賀柵が多賀城に改築」され昇格した可能性は否定できない。設置者は東人。麻呂は同じ737年8月17日に死去するが、仮に麻呂が存命であったとしても、「多賀城造営の榮譽」は功績の大きい東人に譲る可能性はある。

…東人が737年から九州に向かう740年までのわずかな期間に多賀城が東人によって建造される可能性は残る。

…このときには、東人が建造した多賀城を朝猟が修造したという流れになる。

(3) 東人が多賀「城」に関与していないとすると、朝猟の役割が注目される。彼は多賀城碑によれば「修造者(=改修者)」である。多賀柵が修造されて多賀城になったとも理解される。この場合には多賀城の建造者は朝猟になるだろう。

…多賀城建造は淳仁天平宝字六年762年のことになる。考古学資料との突き合わせが必要。この可能性は低いのか。さすがに多賀が国府の役割を果たし始めていたのが762年では遅すぎであろう。

4. 第3節 まとめ

未決であるが(1)か(2)のどちらかだろうが、(1)の可能性がより大きいと考えている。⇒第4節 1.へ

第4節 後世の知見の前代への混入問題

1. 東人の737年までの時代は柵

東人が建造したのは多賀柵であった。しかし、【「多賀城碑」の設置は城の時代の天平宝字六年762年十二月一日】。

この碑の設置時代には柵戸、政庁を含む施設を持つ大規模な城になっていた可能性が大きい。

東人は坂上田村麻呂に並ぶ、あるいは彼に次ぐ「蝦夷征討の英雄」。後代の人間が東人に多賀城設置の榮譽を与えるということは考えられる。「多賀城の礎を築いた榮譽を東人に」というのが多賀城碑碑文の心ではないだろうか。

2. 同じ心は通説に立つ歴史家、考古学者たちにも生まれたのではないか。「巨大な多賀城の遺跡を見て、最初期の多賀城(本当は柵)も巨大だったに違いない」と考えようと決意する。「ヤマト朝廷が可能な限り早く広域支配、統治していた」という根拠を得るために。そうすることで、『日本書紀』の孝徳紀、斉明紀とも大きく矛盾することもなくなる。

3. 史料批判の方法として…今後追究したい問題

拙稿:「夷狄」考 『論語』と『史記』より 東京古田会ニュース No.226 東夷・北狄に見る「後代知見を前代に混在させる可能性・危険性」について考察している。この点をさらに深めていきたい。

時間があれば

第5節 文献研究と考古学と —— 多賀城発掘調査に注目すること

・多賀では最初期には柵があったという仮説を立てているが、ヤマト側が造ったとしても、この「柵の時代」の発掘調査は行われているのだろうか。あるいは行われる可能性は残されているのだろうか。

・最初期の柵は木偏の柵であり、その遺存の可能性は小さいだろう。また、柵は狭く、掘削も浅かったであろう。

後に城になり築地堀に囲まれ、柵戸を住ませ、政庁として機能する城になるとき、その時点で仮に柵が残されていたとしても、広範囲に、深くまで掘削されることになる。最初期の柵の時代の痕跡は、跡形もなく取り除かれ廃棄されるであろう。したがって、現在行われている発掘調査は「多賀柵」のものではなく、780年の「焼失多賀城」、あるいはその後の「再建多賀城」のものではないのか。…これが多賀城遺跡を見学したときの感想であった。

・多賀柵と多賀城を区別して発掘を行おうとする研究者は存在するのか。

・また、磐船柵などの柵、また最初期の多賀柵などのうち幾つかは蝦夷の築造ではないのか。そのような関心を持つ考古学研究者はいないのか。

時間があれば

1. 発表を終わるにあたって 考古学、特に木簡の研究について

・『木簡が語る古代史』吉川弘文館 下巻 平川 南 2001年第1刷発行を読む。

その「四 東国の役所と支配」。

「郡・郷・里制」は717年～740年。短命の制度で740年には「里」が消える。下野国で「里正(=里の長)」と書かれた天平元年729年木簡が出土。下野では国府が活動していた証拠。(108~109頁)

⇒下野よりかなり北にある多賀に政庁ができるようになるのは、717年よりは後になると考えられるのではないか。

「二 蝦夷と多賀城」 多賀城創建期に造られた道路の基礎工事部分から安積郡(福島県郡山市の辺り)の「陽日郷」「川合里」と書かれた木簡が出土。(73頁)

ただし、(1)平川氏は多賀城創建を「多賀城碑」の724年と考えていること(73頁など)には注意を払う必要がある。

・國枝が3節の2の(3)で述べたように、大野東人が737年から740年までの間に多賀城を設置し、国府の活動が本格化したとすれば、この年代は「里正」木簡による717年から740年の期間内に収まることになる。下野国より北にある多賀では、717年よりかなり遅い時期になるだろうと言える。

(2)木簡はその性格上、帰順した蝦夷の情報は得られても(戸籍・納税状況・身分証などの形で)、帰順しない蝦夷やその活動状況の情報は得られないだろう。また、私が想定する最初期の木偏の柵の痕跡は発見されそうにもない。

…平川南氏の論文を読む限りでは、わたしのような問題意識による研究の見通しは暗い。

2. AI(Chat GPT)と会話して

本テーマで Chat GPT と会話したことにより、AI(今回は、Chat GPT だけですが)との付き合い方なども考えさせられました。今後、まとめてみたいと思います。

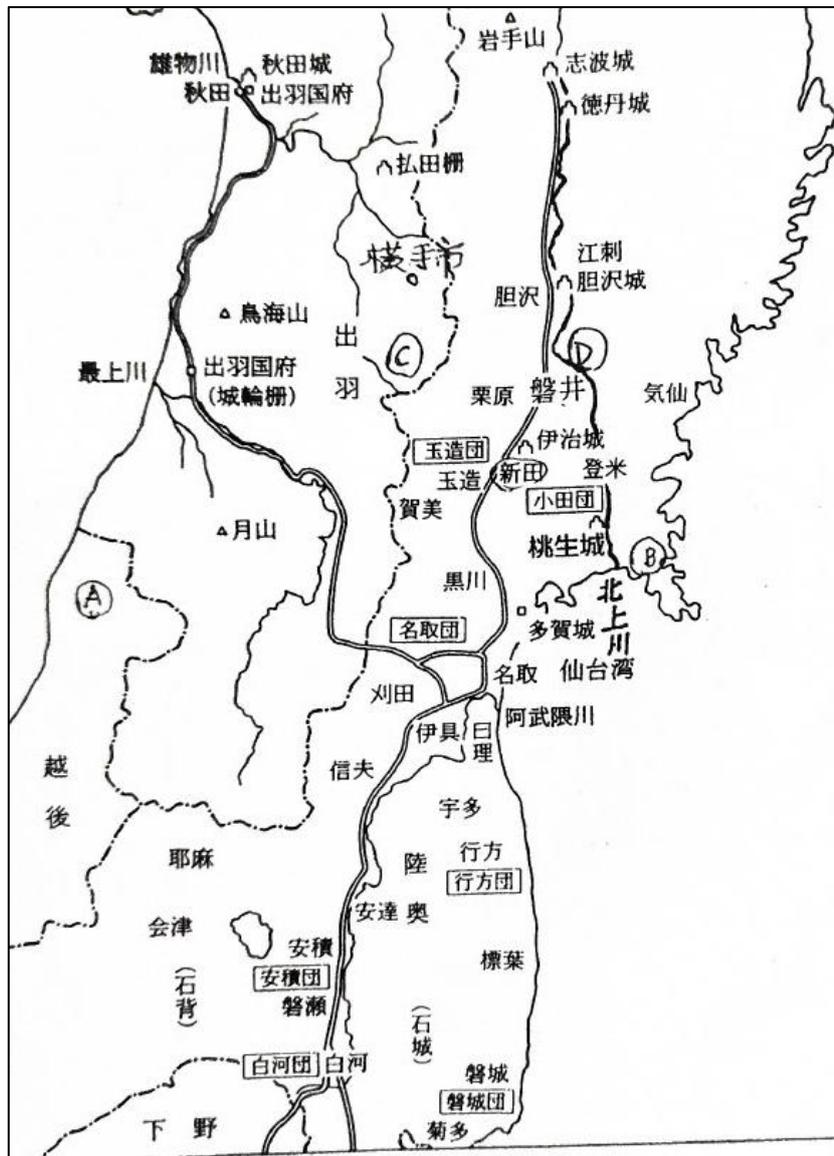
結論:「AI を軽々に信じてはいけません！」

多賀城碑碑文

多賀城 去京一千吾百里 去蝦夷国界一百廿里
 去常陸国界四百十二里 去下野国界二百七十里
 去靺鞨国界三千里

西 此城神龜元年(724年)歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也
 天平宝字六年(762年)歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部卿 壬寅(みずのえとら:762年)
 兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獺修造也
 天平宝字六年(762年)十二月一日

地図



第46図 古代東北地方の郡・城柵・軍団位置図

- Ⓐ 磐船柵
- Ⓑ 牡鹿柵
- Ⓒ 雄勝柵城
- Ⓓ 覺鑿城

大野東人 多賀柵 多賀城 蝦夷戦 史資料 「多賀城碑」は【 】内。それ以外は『続日本紀』より。

文武2年	698 12. 21	石(岩)船柵修理。 同4年700に岩船柵造営…「柵の時代」
元明和銅2年	709 3. 05	佐伯宿祢石湯を征越後蝦夷將軍に任ず
	7. 01	上毛野安麻呂陸奥守に任じ兵器を出羽柵に運ばせる…北上が急展開
7年	714 12. 03	東人正七位上 新羅の使者入京を出迎える…「東人」の初出
元正養老3年	719 1. 13	東人正六位下 同2年 716 9. 23 陸奥の土地はよく肥え、広大
4年	720 9. 28	按察使正五位上・上毛野朝臣広人蝦夷反乱により殺害される 多治比真人県守持節征夷將軍 下野野朝臣石代同副將軍
聖武神龜元年	724 2. 22	東人從五位上
	3. 25	海道の蝦夷反乱、從六位上佐伯宿祢見屋麻呂殺害される
	4. 07	持説將軍正四位上藤原朝臣宇合、副將軍從五位上高橋朝臣安麻呂
		【「多賀城碑」…從四位上東人多賀城建造】 実際は從五位上
	11. 03	宇合ら帰京
2年	725 1, 29	宇合從三位、東人從四位下(進三階)、安麻呂正五位下
聖武天平 元年	729 9. 14	陸奥鎮守 將軍東人言上 「兵士人民の軍功を適正評価し奨励したい」 天皇より承諾される…「東人」東北に初登場
3年	731 1. 29	東人從四位上
9年	737 1. 23	東人言上 「陸奥国から出羽柵へ雄勝を経ずに直通路を造りたい」 ・陸奥国の拠点が多賀柵か？ 玉造柵、新田柵、牡鹿柵 ・持節大使藤原麻呂ら陸奥に進発
	2. 19	東人の言上により藤原麻呂多賀柵到着…多賀柵初登場
	2. 25	東人ら多賀柵進発
	4. 04	城柵、城郭の語が登場…「城の時代」へ？。見落としがあったところ
	4. 14	麻呂の言上：東人の軍人としての優秀さを報告
11年	739 4. 21	東人参議に
12年	740 9. 03	東人九州へ、藤原広嗣の乱平定大將軍…東人東北を去る
13年	741 閏3. 05	東人從三位
14年	742 11. 02	東人 没
聖武天平勝宝元年	749 4. 22	陸奥守百済王敬服 黄金九百両(13. 5kg)貢進 陸奥から初の黄金
孝謙天平宝字元年	757 4. 04	陸奥の桃生柵、出羽国の雄勝柵…柵が久々の登場
淳仁天平宝字2年	758 10. 25	桃生城造営させる(開始か)…固有名の城の初登場…「城の時代」開始
同 3年	759 9. 26	陸奥の桃生城と出羽国の雄勝城造営中
6年	762	「多賀城碑」藤原朝綱が多賀城修造
	12. 01	【多賀城碑】により多賀城碑建立。朝綱によるのかは明示されていない。】
	12. 08	桃生城・雄勝城を造営させた。…完成か。
称徳天平神護2年	766 6. 28	陸奥から黄金、わが国で初の黄金(…重出か？ 立て続けにか？)
称徳神護景雲元年	767 10. 15	伊治城完成
3年	769 1. 30	桃生・伊治の二城の広く肥えた土地
光仁宝龜 11年	780 2. 02	「覺斎城を造り胆沢の地(蝦夷の拠点)を確保せよ」
	3. 22	伊治皆麻呂の乱で多賀城焼失。按察使紀朝臣広純殺害…多賀城初出
	8. 23	由里柵を造る 12. 10 「堅固な砦をつくる」。出羽国大室塞…砦、塞の登場
桓武天応元年	781 5. 24	蝦夷が城や砦を侵略する
	9. 26	「奪われた諸々の城塞を回復した」…戦闘激化、「砦・塞の時代」